

( 続紙 1 )

京都大学	博士 ( 人間・環境学 )	氏名	桜井 三枝子
論文題目	新大陸におけるヨーロッパ中近世の兄弟団定着の文化比較 —スペイン、グアテマラ、エルサルバドルの聖週間儀礼調査から		
(論文内容の要旨)			
<p>本学位申請論文の目的は、旧宗主国スペインの古都バジャドリ市、中米グアテマラのマヤ村落サンティアゴ・アティトラン、エルサルバドルのメスティーツの都市チャルチュアパの3地点において行われたフィールド調査(1992年～2019年)の成果に基づき、「聖週間(復活祭)儀礼」とその主催者たる兄弟団/信徒会(cofradías)の活動の実態を比較考察することにある。</p> <p>序章ではヨーロッパ全般、スペイン、旧スペイン領であったヌエバ・エスパニャ(メキシコ)、日本における兄弟団に関する研究動向が整理され、その起源と類型が詳細に考察された。ヨーロッパでは中世に巡礼者保護・救貧・互助等のために施療院や兄弟団が発生したが、16世紀以降、宗教的差異・身分・ジェンダーを超えて近世ヨーロッパの国家と地域社会とを媒介する中間団体として機能した、という通説が紹介された。</p> <p>第1・2章では、現代の兄弟団に関する考察の歴史的前提としてスペイン人による中米の軍事的・精神的征服の過程が考察された。まず第1章では、コルテスの部下ペドロ・デ・アルバラードらによる中米グアテマラとエルサルバドルの軍事的征服の経緯が概観され、先行研究の整理がなされた。第2章では、現中米5か国を包含した旧グアテマラ総監領におけるカトリックの宣教競争の過程が考察された。ドミニコ会やフランシスコ会等の修道士が先住民村落の宣教を担当し、イエズス会はクリオーリョを対象に総監領首都サンティアゴ市で布教した。</p> <p>第3・4・5章は、聖週間(復活祭)儀礼に関する申請者のフィールド調査の事例報告である。まず第3章では兄弟団発祥の歴史が概観された後で、1994年、スペイン北西部人口約33万人のバジャドリ市の聖週間に参与観察した成果がまとめられた。調査時において、兄弟団は18団体であった。兄弟団会員は各会のユニフォームをまとい、所属教会から出発し、市内中央部を行列する。儀礼の過程は、キリストの死と復活に至るまで聖書の内</p>			

容に忠実に従った「正統派」のスタイルを示していた。

第4章では、現代グアテマラの政治的・社会的背景とインディヘナが大半を占める人口約3万人のサンティアゴ・アティトラン村の地理と現代史が概観された後、同村の聖週間儀礼に関するフィールド調査(1992年～2019年)の結果が行程表にまとめられ詳細に報告された。同村ではあたかもカトリック儀礼と土着儀礼が同時に二重奏のように演奏・演劇化される情景が見られた。すなわち、カトリック教会でキリストの「死と復活」儀礼が行われると同時に、教会の外ではマヤ神話の祖先神マシモン(マム)の「異教的」再生儀礼が行われていた。

第5章では、グアテマラの隣国エルサルバドルの現代史と、同国サンタ・アナ県の人口約7.5万人の街チャルチュアパの地理、略史、社会的背景が概観された後、同市におけるフィールド調査(1999年)に基づき、聖週間儀礼の過程が写真説明を伴って報告された。同市の儀礼はスペインの聖週間儀礼に準じており、ほぼ聖書の内容に即しているが、先スペイン期のメソアメリカ先住民文化のコンテクストにあると思しき要素が一部に垣間見られる、と指摘された。

最終章の第6章では、3地点における儀礼の在り方について総括された。最後に歴史学的視点から、近世における兄弟団の役割について仮説と課題が示された。すなわち、近世スペインでは職業、身分、性別、出身地を問わず、カトリック教徒であれば、所定金額を納めることで兄弟団の会員になれたのであり、兄弟団は近代の厚生省のような機能を負った。他方、グアテマラでは疫病の蔓延で人口が激減する過程で兄弟団が急増しており、これが村落内の孤児や寡婦(夫)を支え、埋葬など福利厚生面で一定の役割を果たしたのであろう、と主張する。

(論文審査の結果の要旨)

本学位申請論文は、申請者が中米とスペインで長年にわたって行ってきた民族学的調査(1992年～2019年)の成果に基づき、「聖週間(復活祭)儀礼」とその主催者たる兄弟団(cofradías)の活動の実態を比較考察することにある。考察対象はスペインのバジャドリー市、グアテマラの先住民村落サンティアゴ・アティトラン、エルサルバドルのメスティソ都市チャルチュアパの3地点である。

序章ではヨーロッパ全般、スペイン、メキシコ、日本における兄弟団に関する先行研究が整理され、中近世における兄弟団の起源と類型が詳細に考察された。

第1・2章では、現代の兄弟団に関する考察の歴史的前提として近世の中米における軍事的・精神的征服の過程が考察された。第1章では、コルテスの部下アルバラードらによる中米グアテマラとエルサルバドルの軍事的征服の過程が考察された。被征服民も一枚岩ではなく、先住民兵の征服者への協力もあったことの意義が検討された。

第2章では、現中米5か国を包含した旧グアテマラ総監領におけるカトリックの宣教競争の過程が詳細に考察された。ドミニコ会やフランシスコ会等の修道士は先住民村落を対象に辺境布教村を担当したが、他方で、イエズス会はクリオーリョを対象に総監領首都サンティアゴ市で布教した、と述べられた。

第3・4・5章は、聖週間儀礼に関する申請者のフィールド調査の事例報告で、本研究の核心部分をなす。まず第3章では、1994年、スペインのバジャドリー市の聖週間儀礼を観察した成果がまとめられた。聖週間儀礼の過程が新約聖書の内容に忠実に従ったいわば「正統派」の様式を示していた、という考察は先行研究に鑑みて妥当といえよう。

第4章では、グアテマラの先住民村落サンティアゴ・アティトランの聖週間儀礼に関する長年のフィールド調査の成果が、多くの写真とともに行程表にまとめられ、詳細に報告された。同村ではカトリック教会でキリストの「死と復活」儀礼が行われると同時に、教会広場とその外ではマヤ神話の祖先神マシモンの「異教的」再生儀礼が行われていた、という指摘は先行研究の乏しいなかで貴重な知見であり、高く評価できる。

第5章では、エルサルバドルのメスティソの町チャルチュアパにおけるフィールド調査(1999年)に基づき、聖週間儀礼の過程が写真説明を伴って報告された。同市の儀礼はスペインの聖週間儀礼に準じており、ほぼ新約聖書の内容に即しているが、メソアメリカ先住民文化のコンテクストにあると思いきいくつかの要素が見うけられる、という結論は、先行研究のない状況において斯界に寄与するところ大であり、説

得的である。

最終章の第6章では、3地点における聖週間儀礼の在り方について総括された。最後に歴史学的視点から、近世における兄弟団の役割について仮説が示された。すなわち、近世スペインでは職業や身分等を問わず、カトリック教徒であれば兄弟団の会員になれたのであり、兄弟団は近代の厚生省のような機能を負った。他方、グアテマラでは疫病の蔓延で人口が激減するなかで兄弟団が急増しており、これが村落内の孤児や寡婦(夫)を支え、福利厚生面で一定の役割を果たしたのであろう、という。以上の歴史学的所見は二次文献に基づく推測の域を出ておらず、より詳細な実証は今後の課題である。

しかしながら、総じて人類学的視点に立つ研究として本論文の価値はきわめて高いと評価できる。兄弟団と聖週間儀礼というテーマで中米とスペインの比較研究を行った先行事例は国内外において知られていない。3地点のフィールド調査、とりわけサンティアゴ・アティトランにおける長期の調査は綿密であるばかりか現場の熱気を伝える点でも白眉のできである。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、令和6年1月30日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

要旨公表可能日： 令和 年 月 日以降